

この4月から「教育エッセイスト」という肩書をもつようにした。新しく作った名刺の裏面には、遠慮がちな肩書が入った。特段、今までと何が違うわけではない。変わったのは、文章をつくる際の自分の意識だろうか。意識というものは、意外と大事なものである。今まで以上に、文章を練るようになった。しかし、出来上がりは、従来と比べて大きな違いはないかもしれない。

構想では、「園長先生奮闘記」を始めるはずだった。だが、「園長通信」を先にスタートさせてしまった。これは、「校長室だより」の延長、続編、第2弾である。なぜ、園長室だよりではないのか。答えは簡単である。園長室が存在しないからである。したがって、さほど広くはない職員室に、先生方と一緒にいるのが現在の私である。まわりは、全員が女性である。紅一点の逆である。さすがに、こういった経験はない。

実は、園長先生奮闘記その1をつくってみた。どうも、しっくりこない。園長通信との違いがむずかしい。奮闘記の方を小説風のエッセイにできればいいのだが、思いの外、うまくいかなかった。それで、とりあえず奮闘記はやめた。結局、やってみたかった奮闘記の要素を園長通信に入れることで、自分を納得させた。

実話に基づくフィクションは、そう甘くはなかった。想像力が乏しい自分には向かないようである。これで、二度目の挫折である。高校生のときも、一度、原稿用紙と万年筆を机上に用意したことがある。さあ、書くぞと意気込んだが、書き出しでつまずいた。あえなく断念した。それ以来である。今回は、少しだけ進歩した。一応原稿はできた。だが、自分でボツにした。

やはり、気の向くまま、何ものにもとらわれず、つれづれなるままに、思いつくままに書いていくのがよい。ものかきとしては、エッセイもいいが、小説を書くことに憧れる。私の場合は、憧れのままで終わりそうである。

エッセイストに教育をつけているのには、それなりの理由がある。自分が生きてきたのは、狭い教育界という場所である。他のことを知らない。そんな人間が、政治だ、経済だ、宗教だと論じるのは、身の程知らずである。教育という枠を決め、制限をかけることで、謙虚に、誠実に向き合うことができる。自分の経験をベースにしながら教育について考えていく。それを文章にしていく。この営みが自分を高めていき、自分を成長させる。とどのつまりは、人間修行である。

今年度からは、福島民友新聞の「随想」を担当する。最初の原稿は、4月20日（土）に掲載となる。本日、出来上がった原稿データをメールで送った。この原稿は、もともとは、この園長通信のためにつくったものだった。つくってみたら、自分らしいものとなった。そこで、民友新聞「随想」に使うことにした。これからも、同じようなことが起こりそうな気がする。